

【学位論文審査の要旨】

人と自然のふれあいは自然ツーリズムにおける重要な要素の一つである。一方、近年、私たちの自然体験が大きく変化し、国立公園など自然豊かな観光地への訪問頻度の低下など、様々な世代で「経験の消失問題」と言われる自然離れが深刻化している。自然に関する経験の欠如により、自然に対する情動的態度の変化、すなわち感情や愛着の減少を引き起こされることが懸念され、多くの研究が進められているものの、情動的態度と多様な生物との共存意志の関係には不明な点が多い。また、自然体験や人と自然のふれあいに関する知見は先進国の事例に大きく偏っている。例えば、東南アジアの子供たちにとって川や滝のような自然環境は一年中利用可能な自然体験の場であり、一般的な先進国とは状況が異なることが予想されるものの、情報は極めて少ない。一方、途上国の多くで自然環境が激変し、IT化に伴う情報環境の変化によって子供たちの自然体験の質を大きく変化していることが予想されるが、研究事例は限られている。

そこで、本論文はマレーシアの人々の自然に関わる体験と、都市の生物多様性保全に関わる情動的態度を明らかにすることを目的として研究を行った。東南アジアに位置するマレーシアの首都クアラルンプールを調査地として、大人（357人）と小学生児童（401名）を対象に幼少期の自然体験と多様な生物に対する情動的態度について調査を行った。分析では単純集計に加えて、若年世代と壮年世代の比較、幼少期の環境（都市部、農村部）における比較を、また、統計モデル（一般化線形混合モデル：GLMM）を用いて現在及び幼少期の自然体験がマレーシア人の生物に対する情動的態度や野生動物との共生意志にどのような影響を与えているかを検討した。

調査の結果、先進国でよく見られる特徴とは異なり、マレーシア人は昆虫の一部、鳥類、リスを好み、哺乳類を嫌う傾向にあることが明らかになった。また、幼少期の自然体験量は野生動物に対する好き嫌いに対して有意な直接的影響を及ぼしていたが、多様な生物との共存意志に対しては有意な間接的な影響を及ぼしていた。一方、マレーシアの児童に対する調査から、現代のマレーシアの児童は直接的な自然体験よりもビデオゲームやインターネット等による代替的自然体験の方が多くなることが明らかになった。そして、児童の生物の好き嫌いとは多様な生物との共存意志に及ぼす要因について統計モデルを用いて分析したところ、直接的な自然体験量は野生動物や自然景観を含む自然に対する好き嫌いに対してのみ有意な影響を及ぼしていたが、代替的自然体験量は多様な生物との共存意志に対して有意な影響を与えていた。そのため、直接的な自然体験だけでなく、代替的自然体験を組み合わせることで、児童の生物多様性に対する愛着や保全意志の醸成に寄与することができると考えられた。今後、人間社会や都市における生活の質を高めるためには、都市の生物多様性がもたらす生態系サービスを積極的に活用することが求められる。一方、先行研究にあるように、都市住民の多様な生物に対する受容性は必ずしも高くないため、都市の生物多様性保全に対する機運を醸成させるためには様々な取り組みが必要である。本研究で得られた成果はマレーシアなどの熱帯発展途上国における生物多様性保全の観点を加

えた都市計画の支援や環境教育において重要な知見をもたらすものである。

以上のように、本論文ではマレーシアの人々の自然に関わる体験と、都市の生物多様性保全に関わる情動的態度を明らかにした。これらの成果は東南アジア地域における生物多様性に考慮した都市計画や環境教育において必要となる基礎的知見であり、ガイドラインや教育マニュアルの作成における理論的基盤を提供するものであり、高く評価される。よって、本論文は博士（観光科学）の学位授与に十分値するものと判断される。